

2020. 5. 24 (日) マタイ20:20~28

20:20 そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、息子たちと一緒にイエスのところに来てひれ伏し、何かを願おうとした。

20:21 イエスが彼女に「何を願うのですか」と言われると、彼女は言った。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるように、おことばを下さい。」

20:22 イエスは答えられた。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。

20:23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」

<説教>

主イエス・キリストは「神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」(ピリピ 2:6-8)

また、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」(Ⅱコリント 8:9)とも使徒パウロは言っています。

主イエスは私たちのために人間として究極の低さ、貧しさ、惨めさ、悲しみ、苦難を甘んじて受けるまでにへりくだってくださいました。

ユダヤ人からも異邦人からも—ということはすべての人類から—捨てられ、人間としての尊厳を捨てて、神にも見捨てられて十字架で死んでくださいました。

「それゆえ」—と使徒パウロは言います—「神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」(ピリピ 2:9)

(先週21日は「昇天日」でもありました。)

「それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」(ピリピ 2:10-11)

イエスのよみがえり、昇天、そして父なる神の右に座して崇められる栄光は、イエスが苦難を受けて十字架で死なれ、最も低くなられることを経てこそそのことでした。

しかしこの真理、神のみこころを、当時十字架の死とよみがえりを目指してエルサレムに向かっていたイエスの弟子たちはまだ知りませんでした。

彼らの思いはひたすら自分が偉くなり、名誉ある地位につき、榮譽を受けること(それはしかも何の苦難も経ずに、いわば楽をして、安易な道で)でした。

そうやって、主イエスより上とは言いませんが、イエス以外の他の誰よりも高く、イエスに次いで偉くなりたいと願っていました。

そうやってこの世でも後の世でも他の人から立派で偉い素晴らしいと思ってもらいた

い、褒めてもらいたい、そんな人になりたい、と熱心に願っていたのです。

そんな弟子たちの肉の欲望—“だれが一番偉いか病”とある人は言いました—が、事もあろうにイエスの十字架の死の予告の直後にまた露わにされたのです。

確かに主のみことばは私たち人間の心の思いを明るみに引き出し、さらしもするのです。

20:20 そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、息子たちと一緒にイエスのところに来てひれ伏し、何かを願おうとした。

20:21 イエスが彼女に「何を願うのですか」と言われると、彼女は言った。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるように、おことばを下さい。」

20:22 イエスは答えられた。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。

「ゼベダイの息子たち」とは、かつてガリラヤ湖の漁師だった「ヤコブとその兄弟ヨハネ」(4:21)のことです。

そしてここでは彼らの「母」が登場します。

ヤコブとヨハネは、イエスに呼ばれたとき「すぐに舟と父親を残してイエスに従った」(4:22)のですが、彼らの「母」も彼らと一緒にイエスに従って来ていたのでしょうか。

彼ら彼女は確かに「イエスのところに来て」しかも「ひれ伏し」て願い求めましたし、「おことばを下さい」とまで言いました。

その姿、態度、言葉はいかにもへりくだってイエスのみことば、みこころを求めているように見えました。

しかしその願い求めたことは、ひたすら他の誰よりも、他人を出し抜いてでも自分が一番偉くなりたい、良い地位につきたいという自己中心のことでした。

“我先に”、“早い者勝ち”、“言った者勝ち”、また“(イエスから)言われた者勝ち”と言わんばかりのものでした。

マルコの福音書では「ヤコブとヨハネが」願って言ったと書かれています。

このヤコブとヨハネは自分の思ったことをすぐに言葉にしたり行動に移さなければ気が済まず、また“俺が、俺が”という気持ちがとても強かったようです(マルコ 9:38、ルカ 9:49,54 参照。そしてこれらの箇所も“だれが一番偉いか問題”と関連して書かれています。)

もっとも、だからこそガリラヤ湖でイエスに召されたときに彼らはすぐにイエスに従ったという面もあると言うこともできるでしょう。

問題は単なる性格のことではなく、どこまでも“自己中心”であり、“神の御意思よりも自分の願い思いを成し遂げたい”、また“神の御意思をも自分の願い思いに合わせるように神に命令する、押し付ける”という“罪”にありました。

弟子がイエスに言った言葉ですから「おことばを下さい」と訳されてはいますが、文章の形としては「言いなさい」という命令形です。

文法上は命令形で言ったり書いたりするほかなかったでしょう。

しかしやはり一番の問題は単なる言葉の“形”ではなく言葉を発した人の“心”にありました。

そんな心を持った「あなたがた」は「自分が何を求めているのか分かっていません。」とイエスは言われました。

それは、「あなたがたは本当に願い求めるべきこと―神の御意思―を求めないで、自分たちの罪の意思を行うこと―願い求めてはならないこと―を求めている。」ということでしょう。

そして更には「あなたがたの願い求めは確かに聞きました。そしてその願いは確かに応えられます（わたしが応え、父なる神も応えてくださる）。ただし、あなたがたが思いもせず願いもしない仕方最終的に応えられるのです。」ということまで言われたのでしよう。

「わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」とイエスは問われ、彼らは「できます」とすぐに答えました。

それに対して、

20:23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」

「杯」とは神から受ける分け前、分配、報いを表しています。

「主は私への割り当て分また杯」（詩篇 16:5）、「私の杯はあふれています。」（詩篇 23:5）などのように祝福や喜びなどを表す場合と、逆に「主は悪者どもの上に網を下す。火と硫黄燃える風が彼らへの杯。」（詩篇 11:6）とか「あなたは主の手から憤りの杯を飲み、よろめかず大杯を飲み干した。」（イザヤ 51:17）などのように神の怒りやさばき、神から来る苦しみなどを表す両方の意味があります。

ヤコブとヨハネがどこまで深く考えて即答したかわかりませんが、イエスが言われた「わたしの杯」とはイエス・キリストゆえの苦難の意味に違いありませんでした。

そして「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。」とのイエスのみことば通りに後になりました。

ヤコブはヘロデ（・アグリッパ）によって殺され、十二使徒の中で最初に殉教することになりました（使徒 12:1-2）。

ヨハネもペテロと共に、初代教会で最初にユダヤ人の指導者たちによって捕らえられ、牢屋に入れられ、イエスの名によって語ることを禁じられることとなりました（使徒 4章）。

晩年は「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかり」「神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。」（黙示録 1:9）ということになりました。

そして最後は釜ゆでにされて殉教したという伝説まであるそうです。

このようにヤコブとヨハネは、やがてイエスの左右に座る確約をイエスから取り付けようとしたが、イエスはその前に彼らが与るイエスゆえの苦難を予告なさったのでした。

「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。」「それはわたしにつき従う弟子としてあなたがたには当然のことなのです。」とイエスは言われたのです。

そのときは彼らにはわかりませんでしたが、やがてよみがえりのイエスが彼らに現れてくださり、目の前で昇天され、ついには約束の聖霊を与えてくださいました。

イエスはご自分の力により、聖霊の力によって彼らの自己中心、虚栄や誇りを砕き、神の前に身を低くへりくだらせ、ついには死に至るまで忠実にイエスに従うイエスの弟子へと彼らを造り変えてくださる善きみこころをその召しの初めからすでに持っておられたのです。

そして続けて言われました。

「しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」

ここには「あなたがたがわたしの杯を飲むのは当然です」（とはすぐ前で見ただけのことです）、「だからそれはあなたがたが『わたしの右と左に座ること』の条件、功績ではありません」ということが大前提としてあります。

「今まで私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。」だから「あなたの御国であなただけの右と左に座らせてください。」とあなたがたは主張できない。

では「今から後、私たちはあなたの杯を飲むことができます。」それなら「あなたの御国であなただけの右と左に座らせてください。」と言えるか、いやそれもできない。

そういう願い要求（欲望）はあなたがた人間のなすべき限度を越えた、越権行為だとまづイエスは言われました。

自分の立派で偉い考えや行いを神と人の前で一神であり人であるお方イエスの前でとりもなおさず一言い立てることの過ち、罪をお示しになったのです。

そのうえでそれは「わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」と、わたしでさえも弁えている限度なのだ、とイエスは言われました。

これはご自分は権威がないと言われたものではありません。

ここで（も）イエスは神の“御子”として「父」に対する完全な信頼・従順・へりくだりを、そして“人の子（つまり人間）”としても神に対する完全な信頼・従順・へりくだりをご自身で言い表されたのです。

そしてそれをヤコブとヨハネとその母にもお示しになりお教えになったのです。

「わたしの父によって備えられた人たちに与えられる」、そういう父なる神の完全に善きみこころが既にあることを知りなさい。知って、喜び、感謝しなさい。それゆえ全く身を低くして信頼し、委ね、従いなさい。そうやって神と人に仕えなさい。何よりもわたしがそうしているのだからわたしつき従い、倣いなさい。もちろん（わたしの右と左に座るかどうかはさておき）あなたがたも「わたしの父によって備えられた人たち」なのだから。

そうイエスはヤコブとヨハネとその母を、そして私たちを戒め、また励まし力づけてくださるのです。